

私の『レ・ミゼラブル』小論

深いヒューマニズムが魂の奥まで揺り動かす 歴史の舞台で人間の善性と悪性の昇華を描く



ロマン主義フランス文学の大河小説「レ・ミゼラブル」。ストーリーのすべては知らなくても、物語の最初に出てくる「銀の燭台」の話を知ったことのない人は少ないだろう。筆者自身も中学時代の学芸会で、上級生がこの劇を演じたシーンが半世紀以上たった今も鮮明に思い出されてくる。

長野県の田舎の中学校。小学校と共用の小さな体育館の舞台での熱演だった。一切れのパンを盗んだがゆえに 19 年間の投獄生活を送ってきた主人公のジャン・ヴァルジャンが、食事と宿を提供されたミリエル司教から初めて人間らしい扱いを受ける。でも翌朝、ふとした出来心からチャペルにあった銀の燭台を二つ掠め盗ってしまった。彼を捕まえて告発する警察に対して司教は次のように言った。

「それはあなたにあげたものなのですよ。そこにある別の二つの銀の燭台もあげたものなのに、なぜ持っていかなかったのですか？」

こうして、その場の疑いは晴れていったのだが、法と正義感が人生のすべてのジャヴェール警視の追及は続いていく。やがてヒロインのコゼットが登場する。中学校の劇は司教の段階までだったが、物語全体は映画となり国内でもミュージカルとしてたびたび上演され評判を呼んできた。私も都合 2 回、東京の帝国劇場で舞台を鑑賞した。長く衰えない人気は出演者の名演もさることながら、原作が訴える深いヒューマニズムが人間の魂の奥まで揺り動かしてくるからではないか――

渡仏の日程が決まると私は 4 月から 5 巻（潮出版社版 辻昶訳）にわたるこの長編を再読した。そして作品につながるこれまでの思い出のすべてを胸に物語の舞台となったパリへと飛んだ。

7 月 10 日、パリは曇りと雨模様が続きこの時期としては意外と暑くはなかった。私はまずマレ地区のヴォージュ広場の一角にあるヴィクトル・ユゴー記念館を訪ねた。古い町並みを残すパリの中でも代表的な歴史地区の一つである。ユゴーが 1832 年から 16 年間暮らしたアパルトマンが 1902 年に改装され記念館になったという。



ヴィクトル・ユゴー記念館

3 階建ての館内にはユゴーの青年時代から壮年、そして老年にいたるまでの肖像画や、彼が書き残した作品のオリジナル手書き原稿や初版本が陳列されていた。外国からの観光客や教師に引率された小学生のグループも訪れている。私もカメラを肩に館内を回った。フラッシュなしで撮影が許されていたのはラッキーだった。

文豪ユゴーは数多くの作品を残しているが、展示品の中で一番多かったのはやはり『レ・



『ミゼラブル』に関連するものだった。なかでも多く目についたのはテナルディエ夫妻にいじめられ続けた幼いコゼットが、大きな水ガメを両手で抱え水を汲みに行く挿絵や彫刻像だった。遠く母親から離され、奴隷のようにこき使われていた彼女は、読者の心に圧倒的な同情心と憐憫感を生みだした。と同時に、そうしたことをさせる人間への憎悪に似た感情をも醸成し物語の効果的な伏線となって

水を運ぶコゼット 両側の絵も いった。

ユゴーと妻のアデル、そして4人の子どもたちがこのアパートマンの2階の部屋に越してきたのは1832年のことだった。『ノートルダム・ド・パリ』などの作品の成功でユゴーはパリの文壇で押しもおされぬ作家となるが、一方で妻アデルの不実の発覚で心に深く傷つけられる。やがて、自作の舞台『ルクレチア・ボルジア』で端役を演じた若い女優ジュリエット・ドゥルーエと出会い、二人はたちまち深い恋に陥った。そんなジュリエットの肖像画も展示されているのも、いかにも“人間ユゴー”の一端をかいま見せてくれる思いがする。

1851年に起こったクーデターでユゴーは亡命を余儀なくされた。イギリス海峡のガーンジー島に居を構えここで執筆に身を捧げ1862年に『レ・ミゼラブル』を書き上げた。1870年に亡命先から戻ると上院議員にもなった。1885年に83年に及ぶ生涯を閉じたが、人々は凱旋門からパンテオンまで行進し国葬を執り行ったという。

こんなユゴーの生涯が刻まれた記念館から、私は翌日、ユゴーと家族が一時期、逗留していたというパリ郊外のビエール市にある「ヴィクトル・ユゴー文学記念館」も訪れた。美しい芝生と緑の林に囲まれた白亜の館には、ユゴーの若き日、亡命の日々、政治的な活動などの資料や直筆原稿などが展示されていた。そこで私は『レ・ミゼラブル』の中でも終盤の山場の舞台「パリの下水道」への入り口をそのフランス人館員に確認した。今はネットの時代である。サッと調べて出てきた番地や公開時間帯を彼から教わると、私はその足で現場へ向かった。



ユゴー文学記念館

場所はセーヌ川沿岸にあるオルセー美術館から1キロほど下流だったが、教えてもらった住所を頼りに下水道の入り口を探すもなかなか見つからない。再びオルセー美術館まで戻った私は観光用の人力自転車を活用した。運転手は180センチをゆうに超えた背の高いお兄さん。大学生の角帽みたいな黒い帽子をかぶり片言の日本語をあやつる愛嬌のよい彼は地理にとっても詳しかった。観光バスや一般車の間をぬぐい、降りかけた雨の中を人力車はやっと目的地に着いた。ところが――

すでに下水見学のための受付は閉まっていた。午後5時20分。ネットで調べた公開時間は午後6時までである。でもその担当者によれば、「入ってから出るまでに時間がかかる。だからもう受付はできない」のだという。いかにもフランス的、いやフランスの公務員的と言ったらよいのだろうか……。



翌日はもう帰国だ。残念ながら、私は地下訪問はあきらめ、周辺や下水への入り口の“証拠写真”を撮るにとどめたのだった。



『レ・ミゼラブル』のなかでは、ジャン・ヴァルジャンが、市街戦で重傷を負ったコゼットの恋人マリユスを背負い下水道に逃げ込む。ある専門家の計算によると彼が潜り抜けた下水道の長さは4.3キロになるという。潜り込んだのは昼間だったが、よろめき出てきたときは夜の9時ころになっていた。

ユゴーは当時のパリの下水道を「巨獣のはらわた」と形容しジャン・ヴァルジャンの苦闘を詳細に描写している。(以下は辻昶訳から)

下水道への入り口

「ジャン・ヴァルジャンは一つの地獄からもう一つの地獄へ転がり落ちたのだ」

「こうした未知の世界では、思い切って踏み出していく一步一步が、最後の一步になるかもしれない」

「モンマルトル下水道が大下水道につながる地点には・・・」

「もうすっかりできあがった墓の中があるだけで、ふたをかぶせたぬかるみの中で死ぬしかないのだ！汚物のおかげで・・・」

「水は脇の下まで来ていた」

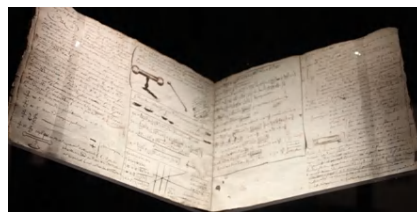
・・・こうして下水道口で宿縁のテナルディエと出会い、物語は大団円に向かって展開していくのである。

ここで再度、物語全体の筋をたどっておこう。

出獄したジャン・ヴァルジャンはマドレーヌと変名。徳行を積み地方都市の市長になるが、彼の名を負わされて無実の罪になった男を救うために名乗り出て再び獄につながる。その後、偶然に脱獄できた彼は、貧しい少女コゼットを悪漢テナルディエから救いパリに隠れる。美しく成長したコゼットは青年マリユスと愛し合うようになる。市街戦に参加し重傷を負ったマリユスを肩に背負ったジャン・ヴァルジャンを下水道の出口で待っていたのはテナルディエ。警視のジャヴェールはこれまで追及してきた“犯罪者”の崇高な精神に打たれ、神と法の正義の間に進退きわまって自殺する。コゼットと結婚したマリユスが駆けつけた時はジャン・ヴァルジャンはすでに死の床にあった。

小説は読む人によって異なる感想があつて当然だが、以下は私の印象に深く残ったり感銘を受けた表現や描写に、自分なりの解説や感想を付け加えた（カッコ内）ものである。物語の流れに沿って紹介してみたい。

「レ・ミゼラブル」 ヴィクトル・ユゴー
(辻 昶訳 潮出版社)



第1巻

- p 97 牢を出たジャン・ヴァルジャンが宿と食事を求めてさまよい歩く・・・「刑務所は宿屋じゃない。つかまるんだな。そしたら入れてやるよ」(出獄した彼に投げかける一般市民の声。社会はこんなものかもしれない)
- p 120 ジャン・ヴァルジャン、司教に会う。
- p 157 釈放は解放にはならない。徒刑場からは出ても、前科からは抜け出せない。
- p 245 テナルディエのかみさん。上の娘はエポニーヌという名前をつけられた。
- p 248 コゼットがごく小さいうちは、ほかのふたりのなぶり者だった。すこし大きくなりだすとすぐに、つまり五つにもならないうちに、彼女はこの家の女中になった。(ここからテナルディエ夫婦によるコゼットの利用と虐待が始まる)
- p 257 マドレーヌ(ジャン・ヴァルジャンの別名)さん——彼が金を儲けるのを見ると、みんなは、「あいつは商売人だ」と言った。金を撒くのを見ると、「やつは野心家だ」と言った。名誉を辞退するのを見ると「ペテン師だ」と言った。社交界との交際を断ると「不作法な奴だ」と言った(これも物事を自分の都合のよいように解釈する、現在にも通ずる一般市民の傾向である)。
- p 268 オオカミの生んだこの犬に人間の顔をつけると、ジャヴェールになる。ジャヴェールは監獄の中でトランプ占いの女を母として生まれた。
- p 302 ファンチーヌはマドレーヌ市長の顔につばをひっかけた。(ファンチーヌはコゼットの母親である。深い事情がわからないうちは、人間こんな行動に出ることもあるのだ)
- p 350 シャンマチュという人物がジャン・ヴァルジャンに代わって捕らえられた。
(一体、何が人々のために役に立つのか、ジャン・ヴァルジャンの良心との精神的な葛藤が続くが、最後には裁判の場に自ら名乗り出て再び投獄されることになる)
- p 447 満足したジャヴェール(この恐ろしい彼にしても卑劣なところは少しもなかった。法の正義を追及した結果だったのだ)。
(第1巻、登場人物の際立った特徴が浮き彫りにされていて、ストーリーにどんでん返しもあって読者を引き付けていく。人間の良心とは、善とは悪とは・・・と最初から考えさせられる)

第2巻

- p 22 1815年6月18日・・・ワーテルローの敗戦
- p 24 ダンテやミケランジェロのような人びとにとっては、年老いることは成長することである。ハンニバルやボナパルトのような人々にとっては衰えることなのだろうか?
- p 32 4時ころ、イギリス軍の情勢は重大だった・・・(この後続く記述はトルストイの『戦

争と平和』や司馬遼太郎の『坂の上の雲』の戦争の詳細記述と極めて似ている)

- p 91 ワーテルローの戦いに参加した軍曹テナルディエ
- p 114 コゼットはテナルディエ家にとって二重に利用価値があった。つまり、母親に送金させていたし、娘の方は働かせていたのである。(コゼットがいかに虐待され奉公を強いられたかとの詳細な記述 → それがひどければひどいほど読者の同情を呼び、ジャン・ヴァルジャンの崇高な人間性が浮き立ち、その落差が読者を深く引きずり込んでいく小説の技巧に感銘する！)
- p 128 「とっととお行きったら！」とかみさんが怒鳴った。コゼットは外に出た。戸が閉まった。(びしゃりとした短文で情景を連想させる「文章の書き方」に学びたい)
- p 183 (ジャン・ヴァルジャンは) コゼットを 1500 フランでもらいうける。
- p 208 彼は 55 で、コゼットは 8 つだったから、生涯に味わったかもしれないすべての愛情が一つに溶け合って、ここでは、えもいわれぬほのかな光のようなものになったのだ。
- p 236 ジャン・ヴァルジャンの変わっているところは、いわば二つの袋を持っている点にあった。一つの袋には聖人のような考えが入っており、もう一つには徒刑囚の恐ろしい才能が入っていた。
- p 310 この本は無限を主演にしたドラマである。人間はわき役だ。
- p 364 ジャン・ヴァルジャンとコゼットが修道院で正式に居られるようになるための芝居、死者に代わり棺おけの中に入り墓場から抜け出す手法・・・(シェクスピアの『ロミオとジュリエット』にそっくりな手法でもある)

第3巻

- p 16 パリは野次馬にはじまり、浮浪児におわる。
- p 36 パリはいつも歯をみせている。どなっているか、笑っているかだ。(上記と併せて面白いパリの形容の工夫に感銘)
- p 82 1827年にマリユスは 17 になった。
- p 86 マリユスの祖父が持っていた父・大佐の残した手紙<この、ワーテルローの戦いで一人の軍曹が私の命を助けてくれた。その男はテナルディエという・・・その男に会ったらできるだけ親切を尽くすように>
- p 90 マリユスは父を崇拜し始めていた。
- p 164 無一文のマリユス・・・
- p 166 弁護士になったマリユス・・・
- p 193 美青年になったマリユス・・・
- p 198 ベンチに座る美しく成長したコゼットの登場とマリユスが惹かれていく描写・・・
- p 212 ルブラン氏(ジャン・ヴァルジャン)が落としたハンカチをコゼットのものと思い、香りをかぎ、昼は胸に当て、肌につけ、夜は唇の下に当てて眠った。「あの人の魂の香りがする！」・・・

- p 258 「みじめな人たち」(レ・ミゼラブル)との言葉が初めて登場する。
- p 331 テナルディエとジャン・ヴァルジャンの出会いと決闘・・・その場に居合わせたマリユスの懊悩。やがてそこにジャヴェールも再登場する。

第4巻

- p 13 1831年と1832年という、七月革命に直接つながる二つの年は、歴史の中でも一番特殊な、一番目につく時期の一つである。
- p 17 王政復古はたおれた。
- p 89 彼は目をあげた。見るとテナルディエの姉娘のエポニーヌだった。
わらや干し草の切れっぱしを髪につけていたが、それはオフィーリアのようにハムレットの狂気がうつって気がふれたためではなく、どこかの馬小屋に寝ていたせいだった。(ここでもシェクスピアを引用している)
- p 94 マリユスはエポニーヌに案内を頼む・・・
- p 115 一緒に外の出かけると、コゼットは、彼の腕にもたれかかり、得意で、うれしくて、胸をふくらませていた。ジャン・ヴァルジャンは、こんなにひたすらな、彼だけで満足している愛情のしるしをみると、考えがとろけて喜びになってしまうような気がした。
- p 118 コゼットがいつまでも愛し続けてくれるように！あの子の心がこちらにやってきて、ここにとどまることを神がさまたげないように・・・
- p 122 コゼットは暗闇の中にいたが、やはり暗闇の中にいるマリユスと同じように、燃え上がる準備ができていた。
・・・二人の恋が深まっていく描写・・・
- p 187 一度の接吻、ただそれだけだった。
- p 281 エポニーヌが仲立ちしてマリユスをコゼットの住む家の案内していく——恋する男を恋する女の住む石造りの家の方に押しやるあの力に引っ張られ、とうとうロミオがジュリエットの庭にはいったように、コゼットの庭にはいりこんだのだった。(同じくシェクスピアの引用である)
- p 283 恋のこうした時期、つまり陶酔がすべてを支配し肉欲がまったく沈黙しているこの時期は・・・信じられないようなマリユスのプラトニックラブ・・・
- p 490 マリユスに淡い恋心を抱いていたエポニーヌが内戦の中でマリユスを守ろうとして銃弾の犠牲になる
- p 495 エポニーヌは実はコゼットのマリユスあての手紙を持っていたが、死ぬ間際まで渡さずにいてしまった。
- p 522 マリユスの手紙を持ったままのジャン・ヴァルジャン(この手紙をこのままポケットにしまっておきさえすればよい・・・ロミオとジュリエットの行き違いと似たような設定である)

第5巻

- p 101 「共和国の名において、バリケードを救ってくれた人が二人いる。マリユス・ポンメルシーとあなただ」「わしはほうびをもらう値打ちがあると思いかね?」「もちろん」(・・・ジャヴェールをもらいうける。→そして射殺すると見せかけて追われている者が追う者を解放してやる。その崇高な人間主義にかたくななジャヴェールの心も溶けていった)
- p 231 ジャヴェールの精神的懊悩・・・
- p 235 人間よりも天使に似た徒刑囚
- p 239 ジャヴェールはジャン・ヴァルジャンを釈放してしまった。見て見ぬふりをして・・・
- p 240 社会は完ぺきではないし、権威もぐらぐらゆれることがあるし、不変なものでもくだけることはある。(矛盾を抱えた社会の仕組みや様相・・・現代にもそのまま通じているのではないだろうか)
- p 296 ジャン・ヴァルジャンとマリユスとの会話。ジャン・ヴァルジャンがマリユスを下水道のなかをかついでいったことを知らせない。(「早くなんとか二人の和解があってほしい」と願う読者の心に、いらだたしさを残させる奥深い狙いだろう。それだけすべてがわかり合った最後の部分では、読者に快哉を叫ばせる構成となっているのではないか)
- p 325 コゼットとマリユスの結婚→新婚の初夜。肉体(セックス)の描写は一切なく、魂の昇華を綴っている。(近年の売れっ子作家の作品のように、あからさまな性の描写はなくても、十分に読者の心を引っ張っていけるとところに本当の文学としての力があることを改めて思う)
- p 383 「この子の幸せが私の一生の目的だった。いま神は、私の退場の書類に御署名になってもいいのだ。コゼット、おまえは幸せになった。私の役目は終わったのだ」
- p 420 お金をせびりに来たテナルディエが結果的にマリユスのジャン・ヴァルジャンに対する誤解を氷解させる。(マリユスの悔恨とジャン・ヴァルジャンへの感謝。ここで読者は心にわだかまっていたものが一気に溶け溜飲を下げる。物語の大団円である)
- p 449 ジャン・ヴァルジャンが無くなる寸前の言葉。「コゼットに二本の燭台を形見に贈る」(ここで物語の冒頭と最後がきちんと結ばれるのである)

※ 出版に関する逸話



発売当日は長蛇の列ができ、本は飛ぶように売れた。ユゴーは当初、作品の売れ行きを心配し出版社に「？」とだけ記した問い合わせの手紙を出した。出版社からは「！」とだけ記された返事を受け取ったという。それぞれ「売れている?」「売れて、売れて！」を意味したと思われるこれらの2通は、世界一短い手紙であると言われている。

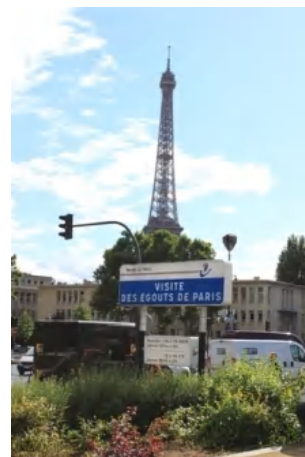


私の結論です

手っとり早い浅い読み物が多い現代社会で、こうした歴史の評価に耐えてきた重厚な古典を読むことは少々きついかもしれない。でも、かつて高校の担任教師が夏休みを前に言ったことを思い出す。

「大作を読みなさい、大作を。今はすべてわからなくてもよい。でも読み終えたとき自分が少し偉くなったような気がするよ、きっと」

「小論」など書いても正直、私自身、すべてが分かったわけでもない。作品を再読してその舞台を訪れても自分の場合、偉くなったようには感じなかった（笑い）。それでも老いかけた心に瑞々しさを与えてくれ、人生そのものもちょっぴり深くなったような気がするのには確かである。これから無限の未来ある若者にも、体力のみならず心まで枯れつつあるシニアにもぜひ読むことをお勧めしたい作品である。



下水道の入り口からエッフェル塔を望む